

# 相手の言葉学ぶ大切さ

週のはじめに考える



大学で学生と接していると、メディアに「完璧さ」を求める声が強いです。この「感情」は学生だけにどまらず、社会全体を覆うメディア批判とも重なると思われる。その中身として主に三つが挙げられる。



第一は「無謬性」だ。報道は絶対に間違いが許されないとの思い込みがある。例えば、週刊誌の憶測記事はもつてのほかとされるが、果たしてそれが。全メディアが均質で同様の「確からしさ」を身にまといては、私たちの生活は味気ないものになるだろう。雑多な情報があつてこそ豊かな情報空間が生まれる。

事実は一つだから、さまざまな報道があるのはおかしことの声もよく聞く。しかし、ものの見方は多様で、同じ事象を見ても受け取り方は人によって異なる。こうした声を突き詰めると、メディアは一つあれば十分ということになりかねない。

受け手側はメディアの違いを理解し、情報を見分ける力を身に付ける必要があるし、ましてや公権力に「浄化」を求めるようなことがあつてはならない。そもそも締め切りを迫られて報じるにあたり、完璧さを絶対条件にしては、記事や番組は出せないだろう。大切なのは、不確かなことを断定しない「誠実さ」や、とことん真実に迫るといふ真摯な「追求努力」があるかどうかだ。

第二は「品行方正」だ。プライバシーを侵害するなど、もつてのほか、記者は社会の迷惑にならないよう範を示す立ち振る舞いが必要といつわけた。それは、ある意味正しいものの、正当な取材行為が日常生活のルールと異なることはままある。とりわけ事件や事故に遭遇し、緊急性や非代替性がある際は形式的に法に反

# ジャーナリズムのやんちゃ性



## 時代を読む

専修大学教授 山田 健太

することがあり得る。何より取材で政治家や公務員から情報を聞き出す行為自体、形式的には情報漏洩をそのかす行為にほかならない。

あえて言えば、みんなが聖人君子のように振る舞えば、私たちの知る権利は満たされないことになる。しかし、今の学生には、そこまで無理しなくていいのではないかとの気持ちも強い。必要以上に行儀のよさが強調される社会は層層しく、多様性を失うことにならないか。



第三は「中立性」だ。主張することとは良くない、報道は常に不偏不党であるべきだとの判断基準は、時に政府が言っていることは正しいはずで、否定するのはおかしことと思いつつなれる。いわゆる偏回批判といつた。もちろんジャーナリズムが党派性を帯び、政治的、社会的対立をまおることに糧を出してしまつては、分断が進み、報道機関の重要な機能である議題設定も、社会的合意を生み出すこともできなくなる。

だが、日本の報道機関は客観中立をきつた一つ、取材先と協調的な関係をつくる中で情報を入手してきた結果、メディアと政治の距離の近さが問題になった。一方、市民運動や住民運動に買入れすることは、運動と一体化することで許されないと評価されてきた。しかし、社会の弱い立場に寄り添い、小さな声を拾つ作業こそが「公正さ」の発露であるはずだ。そもそも課題解決のためにも一歩踏み込んだ「主張」が必要な場合は多いだろう。

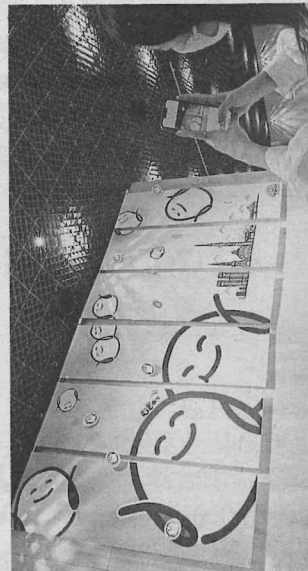
もちろん、やんちゃが過ぎると世の中から嫌われるし、ジャーナリストとして最も大切な信頼性が失われるため、十分な注意と節度が必要ないとは言つてもいい。



先月10日付の夕刊社会面で大根おろしを使ったタケノコのあく抜きを紹介しました。QRコード。読者からの投稿をきっかけにしたものでしたが、タケノコの季節が終わりに近づいており、急いで取材を行いました。よく知られている米ぬかを使った方法は、ぬかの甘い風味がタケノコに付くなどの

東京・内幸町の東京新聞階ロビーに大きな懸垂幕がました。本紙創刊百四十周年クスター「むぎゅ」が東京つよよなイメージの幕です。一は、幅四び。空調の風「むぎゅ」が小刻みに揺れ来訪者をお迎えるようにした。

「むぎゅ」の生みの親は、デザインを担当する西川



展示が始まった東京新聞140キャラクター「むぎゅ」の懸垂幕。都代田区の東京新聞1階ロビー

2023.6.18